

洛友会会報

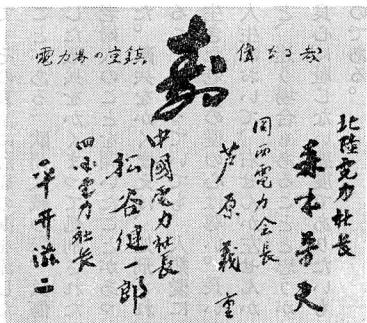
京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工學教室内
會友

秋窓雜記

洛友会会長 松田長三郎

① 偉大なる哉 現在、我が電
氣関係教室からの卒業生は、約五
二〇〇名、講習所からの卒業生一
二七八名を併せて、計約六五〇〇
名、現存の方々は大体四七〇〇名
である。これらの方々は、全国各
地、各方面で活躍しておられるこ
とは、ご同慶に堪えない所である
が、このうち電力界について考え
てみても、随分多数の方々がおら
れて、我國の公益的基本産業たる
電氣事業界に、献身しておられる
ことはありがたい。しかも全国九
地区の電力会社のうち、四電力会
社の主腦が、うちの卒業生である
ことはお目出度く、また私共の大
きな誇りでもある。本誌前号にも
一寸記したところであるが、電力
会社の社長と言えば、その地方に
おける技術界・財界の指導的地位
にある人であるから、その責任は
実に重大である。この重責を荷っ
ている人が、我國電力界の大御所

であり、関西財界の指導者であり
政府の科学技術の委員でもある芦
原義重さんを初め、北陸電力の森
本社長、中国電力の松谷社長、四
国電力の平井社長の三社長であ
る。そんな訳で、今回、これらの
方々にお願ひして、寄せ書きをし
て頂いたのが、ここに掲げる色紙
である。



皆さん、公私とも大変お忙がし
いなかをご署名下さったことを、
厚く御礼申し上げます。こういう

地位は、求めて容易に得られるも
のではない。その手腕力量、経営
経綸・徳望・健康・幸運等、三拍
子も四拍子も揃って、初めて与え
られる地位であると同時に、その
責任も重大であり、多事多難の電
力界の最高責任者として、誠にご
苦勞のこととお察しする。健康第
一であるから、切にご自重ご加餐
の上、御活躍の程をお祈りする。

② 巨星墜つ 去る9月8日、
京都大学名誉教授湯川秀樹博士は
急性肺炎のため急逝された。行年
74才。巨星墜つる感一入である。
同博士が少壮27才で、中間子理論
を発表されたことは有名であり、
昭和17年には文化勲章、昭和24年
にはノーベル物理学賞を受章され
た。この受賞は、当時敗戦後、一
般が虚脱絶望のどん底にあつたた
けに、明るい希望と自信を与えら
れたことは甚だ大きかった。当時
学に志ざす青年のあこがれの的で
あり、寧ろ神格化されてもいた位
であつた。しかし、理論物理学や
数学などは、新知見をつけ加える
ことは、なかなか容易なことでは
ないが、実験物理学や工学方面など
では、一生懸命に努力すれば、そ
れなりに、何程かの貢献をするこ
とができるのではないかと、遂大
学を志ざす学生諸君に言ったこと
があり、このことを同博士に伝え
たこともあつた。しかし誰れが、

どの方面 いつ、どんな大きな
仕事をしでかすか、学界・技術界
・業界において、一切、未知数で
ある。業界における松下幸之助さ
んの成功や、最近における京都セ
ラムミックの世界進出、その他枚挙
に遑無い位である。

湯川博士の学識は、単にご専門
の理論物理学に止まらず、広く歴
史・文学・宗教・哲学などにも、
幅広く造詣の深かつたことは敬服
の至りであり、著書や講演会など
にも出席せられて、一般の啓蒙に
も留意せられ、筆者も、二回許り
お願ひしたことがあつたが、これ
らの啓蒙の図書や「天方論」三冊
の如きは、永く学徒の精神的糧と
なるであらう。博士が、晩年特に
留意されたのは、世界連邦・世界
平和・核兵器廃絶の問題であつ
た。これら、遙かな人類の理想は
いつの日か、達成されるであらう
か。科学技術の發達は喜ぶべきか
否か、悪用すれば、人類の不幸、
この上ない。科学者・技術者は、
いつも、大なり小なり、こういう
疑問を持つてあらう。

③ 十年後の電氣事業 「電氣
評論」誌8月号から、関西電力最
高顧問和田昌博博士が、題記のよ
うな問題について連載しておられ
るが、誠に我國電氣事業界の将来
当面する重要な課題であると考え
られる。先般の石油ショック以来

我國でも、エネルギー問題は深刻
に受けとめられ、代替エネルギー
や省エネルギー対策が、研究され
て来ているが、所謂サンシャイン
計画やムーンライト計画などと云
つた一連の課題は、或る程度進展
して、香川県における太陽熱
及び光による太陽発電所も前者は
運転を開始されたが、和田博士も
述べられておられるように、これ
からは、太陽電池、燃料電池、二
次電池等の發達により、これ等が
配電末端に設けられ、一九九〇年
代に花開く発電方式であると云っ
ておられるが、そうならば、今の
所、小規模の地域発電と云うこと
になり、電力会社にとつても重大
な問題になって来よう。尚この
際、小水力開発についても、一層
切実に検討すべきであらうが、大
電力發生については、やはり従來
の火力・水力・原子力発電が本命
である。

④ 水質汚染 京都の水はおい
しいとの定評があるが、去る9月
中旬頃、京都や大阪の水道水は、
悪臭に悩まされた。これは琵琶湖
に發生した一種のプランクトンに
よるものであり、大阪市では、そ
の脱臭のために、〇〇万円もの活
性炭素を使ったとのことであるが
水温が23℃になって、プランクト
ンの發生が停止しからは正常に
戻った。

近來、河川や湖沼の汚染も亦、甚だしくなっている。東京の隅田川、京都の鴨川、大阪の淀川など少しは良くはなったが、ドイツのライン河、ロンドンのテムズ河、神戸港、大阪港、さてはハンブルグ港なども同様である。

かつて、ノルウェーの探険家へイエエル氏は「一九四七年、コンチキ号で、太平洋を渡った時、海はきれいだった。だが、20年後、ラー号でアフリカ北岸から米國へ目指した時は、毎日のように、空きびん・プラスチック容器

・タンカーの捨てた油に出くわした。……海底は分割できても、潮流をせき止めることはできない。こうしている間にも、母なる海は死につつある」と嘆いた。今や地球上も、海も空も、科学技術・各種工業の発達によってこわされ、汚染されつつあるのが現状でありこの傾向は、益々大きくなって行く。破壊された自然はもう、元へ帰らない。人類の幸福はいづこに求むべきか。

踏むか踏まざるか キリシタンが、天下のご発度であった時、キリシタンが否かを調べるために、踏絵が使われた。踏めば許されるが、踏まなければキリシタンとして処刑された。踏絵の前に立たされた時、踏むか踏まざるか。正に、生死の岐るる重大な最

後の一瞬である。多くの若い乙女が、信仰に生き喜こんで死を掴んだ。こういう事蹟を何ヶ所か訪れて、その哀話に悲痛の涙を流したことがある。欧州大戦の際、負傷した敵兵をかくまっつて処刑された老婦人のことを聞いたことがあった。敵兵をかくまえば、処刑されることは判っていても、人類愛に生きた老婆の愛の心は尊い。長い人生において、右せんか左せんかと、迷う場合もあることと思うが良心に耻じない態度でありたいものである。

思いやり 去る9月、京都の国際会議場で、精神科学に関する国際会議が開催されたが、その際、オーストリアからの医師ご夫婦が、ホテルで、僅かの間に20万円を盗まれ、楽しみにしていた京都観光も、出来ぬと嘆いているとの新聞報道を見た京都及び各地の人達から、即日お見舞の金20万円が寄せられ、又宿泊や京都案内を申し出られた方々もあった。これにはご当人も、日本人の深い親切心に感謝もし、驚かれもした。盗まれた丈けは頂くが、他はお返しすると云われたが、それにしても世の中には善意の人も多いが、悪の根源も無くならない。相手の迷惑を考えては、こういう人の商売は成り立たないだろう。私自身も、何回かすりにつられたし、

泥棒に入られたことがあり、孫や甥が、夫々20万円程を巴里空港でスラれて困ったことがあった。相手の立場に立って、物考えよと云つても、こういう手合いには通用しない。「浜の真さは尽きる」とも、世に盗人の種は尽くまじ」と述べた豪盗の言葉を思い出す。

図書館 この世に生を享けてから88年になるが、専門分野のことは、一応は研究もし修得もして来たが、現在の科学技術の進歩発達には目覚ましく、しかもそのテンポが非常に早く、所謂日進月歩の状態で、益々広く且つ深くなつて行くから、未知のことが一杯で文字通り、浅学非才を嘆かせざるを得ぬ状態であり、況んや、専門外の分野においては、尚更であるが世には各方面において、造詣の深い方々がおられることに驚嘆することも多い。

かつて私は図書館の面倒を見ていたことがあったが、図書館にはあらゆる分野における内外古今の書籍や文献が、或る程度收藏されている。京都大学の各教室には、夫々の専門分野における内外の書籍雑誌が蒐められているし、本部の図書館はこれを総括している。我国での最大の図書館は国会図書館で、欲しい文献なり図書は、同所に云つてやれば、その所在を教

えてもらえる。かつて、北海道大学の或る教授は、捜しておられる書物を、国会図書館に照会されたことが判り、ご用立てしたことがあった。斯く、日本國中は勿論、今後は世界の図書館の連絡も出来るようになるであろう。小生の知っている大きな図書館は、米國の議会図書館、英國の大英博物館、又今はどうなっているか知らぬが、伯林のスターツ・ビブリオテーク、レニングラード図書館など見せて貰ったことがある。

八十八年唯夢の如し 自分のことを申して甚だ恐縮ですが、昨年、私の米寿を祝して、芦原義重さんを代表する記念会から、私の随筆集(正冊と別刷)を出して下さったことは感謝に堪えない所であったが、公的には、満年で祝われるので、今年京都市長さんから、市民の皆さんからの慶祝の意を籠めて、敬老記念品を恵まれ、恐縮している次第であるが、禄々として、いつの間にか馬齢を加えたと云うだけであるが、孫が「一

週間位、すぐに経つて了う」と嘆いていたが、「一週間どころか、80何年もスグだったよ」と云ったことがあったが、顧みると、この88年の歳月は、ついにこないだのようにも思えるし、又非常に長かったようにも思える。何しろ、明治・大正・昭和と、三世代に亘り、昭和も既に半世紀を超えている。

この間には、日清・日露の両戦争、何れも当時の強大国であったから、それこそ、国運を賭して、挙国一致して戦った。更には、第一次世界戦争・関東大震災・日支事変・第二次世界大戦・敗戦と云う、国家的大事件に遭遇し、世界も、日本も、人も、文化も、人生観も、価値観も、目まぐるしく変転した。敗戦後、36年にして世界も羨む経済大国になった。こんなに大きな激動の変化を経験し得たことは稀有のことであり、更に現下の酷しい世界の情勢を考えると、今後の変遷は想像もつき兼ねる望洋の嘆に沈む位であるが、これからも驚馬に鞭うちながら頑張つてゆきたいと願っている。

ソ連領シルクロードの旅 ②

三月二日 早朝三時日本人添乗員原女史の電話コール 日覚める。ソ連のホ

テルでは早朝コールはやらんらしい。各階には鍵当番の女性が終夜勤務しているが、彼女等の作業ノ

昭和七年卒 鈴 木 茂

ルマにもないのか？あっても当てにならないのか？添乗員の苦勞が察せられる。

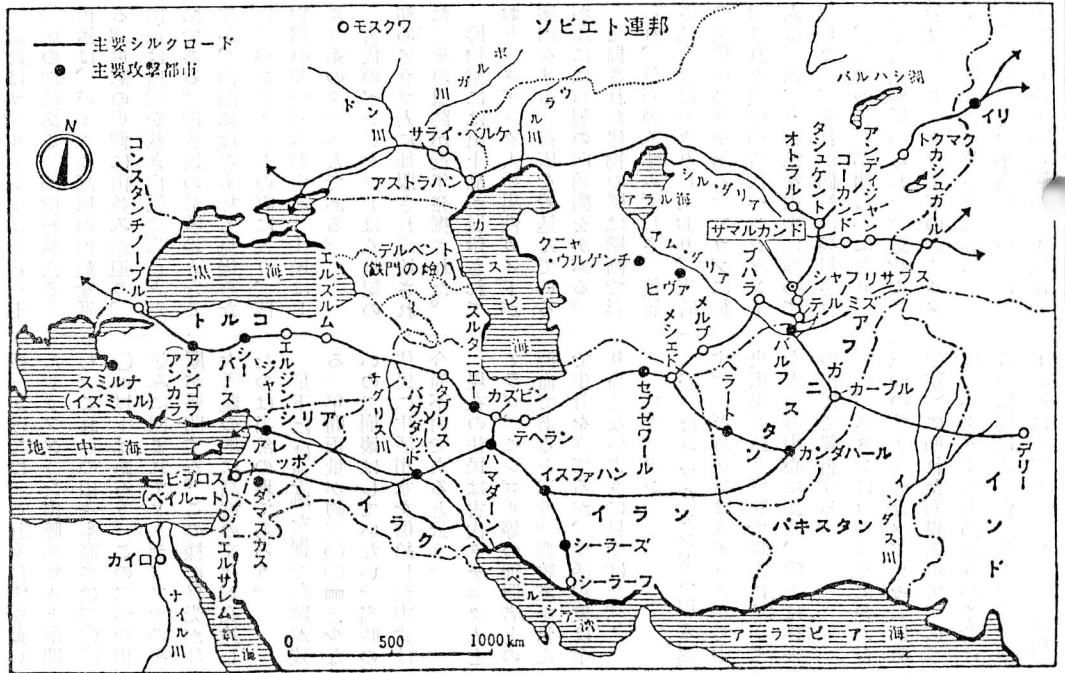
早朝のシベリヤの気温は低く、戸外へ出ると実に寒かった。

五時タシュケント行き大型ジェット機は離陸した。機長が日本語で挨拶を送って来るが、我々日本人観光国に対するサービスであろう。相客は勿論ロシア人であるが軍服姿が目立つ。中国が神経を尖らす程の大軍が極東地方に居る証拠か？

暁暗の夜空を対地速度九五〇km/hrで約五時間西北へ飛びノボシビリスクへ給油着陸する。軍服姿とは此地で別れることになったが彼等の機内乗込みは最終、退去は最初と云う特別扱いである。これもソ連のお国振りを示すものであらう。

一行の退去は最後になった。ローディングブリッジがないので滑走路の一端に立って連絡バスを待った。当地は北緯五五度、北極太の北端以北に在り、夜は未だ明切っていないので実に寒かった。待機時間は精々五々六分だったろうが耐寒装備の貧弱な一行は全くふるえ上った。

空港ビルの二階の待合室へ案内されて小憩をとる。一階の一般待合室は広くて大きい。長椅子や通路の土間に乗客が長々と寝ており



その不作法に当初は驚いたが冷静に考えると同情になる。我々も一日以上待たされたがホテルで暮すことが出来た。彼等の中には終始空

港ビルで待たされた人々もあつた。待機時間は二時間以上あったらしい。この間に夜は明けた。出発地との間に三時間の時差がある。

相客はがと変り、東洋人が増えた。隣席に坐つたのは朝鮮婦人であった。互に言葉を交したが、コリヤ、ヤボン程度しか通じない。第二次大戦中に沿海州在住人は、中央アジアに強制移住をさせられたが、その人達であらう。離陸して針路を西南へ三時間飛ぶとタシュケント空港へ着いた。此処で乗換えた。出発後既に一〇時間余を経過したが、時刻は未だ昼下りである。機外の気候は既に春であった。緯度は秋田と同じ位である。

タシュケント空港で食事をする。三度目の食事であるが、これが昼食であった、これも時差のいたずらと云えよう。ターボプロップ機に乗換えてサマルカンドへ向う。高度一〇〇〇m位で飛ぶので下の景色がよく眺められる。

下界の景観は農場が拓け、樹木は青々と繁り、恰も日本の平野の上を飛ぶ様な眺めであった。蛇がのたうつように曲りくねって流れるシルダリヤが視界に入る。東方には白雪を戴いた天山山脈の山並みが波濤の様に続き、フェルガナ渓谷の谷が山並みに喰い込んでいる。低い山地を越えるとソグディアナの平原の上に出る。

農場が拓け、工場の煙突からは例によって黒煙が立ち昇る風景が続く。農場には国営農場と集団農

場があり、前者では農民は工場労働者と同様に月給で報酬を受けるが、後者では収穫の一定量を国に収めると残りは農民に分配される一種の請負式であるとディアナが説明をした。

約五〇分後サマルカンド空港へ着陸した。この辺場の端末空港にも多数の飛行機が駐機する。念のため数えると、その数は六であった。小憩をとっていると、イッリスタのバスと現地ガイドの若いロシア女性が迎えに来た。

此処で今日の今後のスケジュールが知らされた。ペンジケント及サマルカンド観光を一気に消化してしまふと云うのである。予定では一・五日をかけるはずであったが、飛行機のおくれを一気に取戻してしまふ強行スケジュールである。起床以後一〇時間以上経っており、我々夫婦も一行も相当疲れてはいるが止むをえない。一文句云いたい所であったが、あつと云う間の出来事であった。但しディアナは此処で消えてホテルへ先行してしまふ。このタフなロシア女も少々疲れたのであらう。

サマルカンドは古くから栄えた都市であった。BC四世紀にアレキサンダーが征服をしている。一三世紀にはジンギスカンが攻略をした。彼の征服は史上有名な惨虐なもので、旧都市は徹底的に破壊

され、四〇万市民の半分は惨殺された。

彼はチャガタイ汗国を建てて息子を封じて汗とし、サマルカンドを都として新都市を築いた。その子孫や後継者が、一九世紀末まで中央アジアを支配することになった。

一、アクラ・シブ遺蹟

空港の前から街道を南へ下ると廢墟遺蹟の中に入る。古代サマルカンドが眠るアクラシブの遺蹟である。紀元前アレキサンダーが征服した時、この首都はアランドと呼ばれる繁華にして美麗な首都であった。二二二二年シブ汗により攻略されたが、彼は愛孫の戦死に動乱し、この美しい首都を徹底的に破壊した。遺蹟は青草の蒸す丘であり、前世紀の央ば頃から発掘が続き、昔の家屋の残骸やこわれた輔道や、陶器類が出土している。道は廢墟の真中を通り我々は車窓からこれを眺めた。現在の市街はこの南に再建されており、ウスベク共和国の重要都市として栄え、回教文化遺蹟は此処にある。

街道を南へ進むと郊外へ出、農地が広がる。ソグディアナの沃野である。一つの交叉点に差しかかる。吾々が南行する道はアフガニスタンへ通じ、この交叉点から四〇〇kmでアフガニスタン国境へ達し、これとクロスし東西の街道は西から延びてきたシルクロードである。

ある。やがてウスベク共和国の国境を通過して、バスはタジク共和国へ入る。

二、ベンジケント遺蹟

遺蹟はサマルカントから南へ七〇kmの地にある。国境を越えると街道は、パミール高原の西麓を通る。車窓の東側に山並みと迫り、山頂は白雪を戴き山肌は岩山と草原である。游牧民の放牧地となる故か、山脈には森も林も見当らない。ベンジケントの町に入り、博物館の前でバスが止る。住民はトルコ系のタヂェ人である。

古代のベンジケントは八世紀の初めアラブ人に征服され破壊された。その遺蹟が近年発掘された。博物館には出土品が展示されており、タヂェ人の男性ガイドが案内をする。背広を着込んでいるが頭には布製の四角帽をかぶる。発掘された建物の壁は壁画で彩られ、色彩のみずみずしさ、優雅さは今尚はつきりしており、当時の文化の高さを語る。アラブに征服された当時の古代ベンジケント人は記録、文書類を山中に埋めて残したが、それが偶然に発見されて、遺蹟の存在が明らかになり、近年発掘が進められた。遺物の半分はレーニングラードのエミルターヂェ博物館に移されている。

遺蹟は郊外の小高い丘の上にあつた。丘の上から眺めた景観は壯大無類であつた。東は世界の屋根パミール高原の白雪を戴いた山並みが連なり、最高のコムコニズム峰は高さ七四九五mある。南から西へかけては、これも白雪を戴いたザラフシャン山脈が延々と取囲む。これらの山々も高さは三〇〇〇m以上はある。この二つの山並みに囲まれてソグディアナの平原が展開する。この様に風光が壯大秀麗の地に高度の文化が発達したのは当然の理であろう。

足下には遺蹟を掘った跡が残る。年間雨量が約三〇〇mmと少ないので崩壊はしていない。当時の住民に生活用水を供給した方式は今尚不明であると云う。

現在の住民は古代タヂェク人とアラブ、モンゴル等の征服者との混血であると云う。農牧業を営んで生計を立てるが、生活程度は余り高くないように見受けた。

バスはサマルカンドへ引き返す。レギスタンはタヂェク語で中央広場と云う意味で現在に於いても市街の中心にあり、附近は往來の市民で雑沓する。

レギスタンはコの字型に並んだ三つの壮大華麗なメドレセ(回教学院)に囲れた石畳広場で、広さは一ヘクタールもあるか?昔はこの広場に市がたつたと云う。メドレセは正門とミナレット(尖頭)

とドームのあるモスク(礼拝堂)と露天の中庭を囲んで二階建の回廊式建物がある。これらの建物は光彩陸離たるタイルで飾られ、目もくらむばかりに美しい。

その一つのテリヤからメドルセの内部へ導かれる。正門を入ると左手にドームのある、モスクがある。回教は偶像崇拜を禁止するのでアラマーを象徴するようなものはない。メッカの方向に窓が明けられ、僧が祈る祭壇が設けられ、その後の土間が信者が坐る場所である。モスクの内壁は金箔で飾られた豪華なもので、金の使用量は一二九六kgであるとガイドが説明した。ミナレットは信者に礼拝の時刻を告げる。露天の石畳内庭は講義の行われた場所、回廊式建物は学生の寄宿舎である。現在は学生は居らず観光に供せられている。

これらのメドレセの建てられたのは、チムールの没後一五七二世紀であるが、度々の地震により崩壊したが、現在は修復されている。

レギスタンの近く、街道に面してビビ、ハヌイム、モスレムがある。遺蹟建築中で最も壮大であり、チムールが最も愛したビビ王妃の建てたもので、ハヌイムはハンの女性詞である。彼女は中国のある皇帝の娘でチムールが遠征中に彼女の意図で創建されたと云う伝説がある。

残念乍らモスレムは地震で崩壊し、現在修復中であつた。正門の大きなアーチを嚮ると敷石の内庭があり、その正面に大きなドームとモスクがある。その表面を飾る美しいタイルは半ば剥離していたが、それでも所々は色鮮やかに残って当時の面影を偲せる。

彼女の墓は街道を隔てた丘にあるが、これも修復中で公開されない。○(次号に続く)

○概要 四月一日より十日まで、ハノーバ国際見本市、フランス電設工業会、イギリス電設工業会等の視察を計画して一行十三名の研修団を作り、ハノーバ、パリ、ロンドンを訪問いたしました。このように研修団は社団法人日本電

紀であるが、度々の地震により崩壊したが、現在は修復されている。

レギスタンの近く、街道に面してビビ、ハヌイム、モスレムがある。遺蹟建築中で最も壮大であり、チムールが最も愛したビビ王妃の建てたもので、ハヌイムはハンの女性詞である。彼女は中国のある皇帝の娘でチムールが遠征中に彼女の意図で創建されたと云う伝説がある。

残念乍らモスレムは地震で崩壊し、現在修復中であつた。正門の大きなアーチを嚮ると敷石の内庭があり、その正面に大きなドームとモスクがある。その表面を飾る美しいタイルは半ば剥離していたが、それでも所々は色鮮やかに残って当時の面影を偲せる。

彼女の墓は街道を隔てた丘にあるが、これも修復中で公開されない。○(次号に続く)

ハノーバ等雑感

昭和17年卒 古川 満智雄

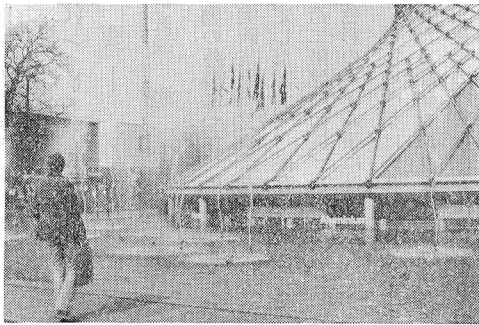
設工業会が業界発展のため計画したもので、私も副団長として参加させて頂きました。そして色々の貴重な体験をして参りましたのでこの機会に最も印象的な、ハノーバ国際見本市の様態等に重点をおいて概略を書かして頂きました。

□ハノーバ国際見本市 我々は成田空港よりスカンジナビヤ航空機に乗り、アンカレッジ、コペンハーゲンを経由してハノーバ空港に直行し、バスでハノーバ国際見本市展示場に参りました。ハノーバの町は既に見本市一色に包まれていました。四月と云うのにこの地方一帯は美しい芝生や、小麦の緑にあざやかに色取られていて、気候は日本と良く似ているように思われました。ハノーバ国際見本市は欧州最大の常設会場で四月一日より八日まで開催され、出展は東西を問わず、全世界から参加し、電気、機械、土木、建築、電設資材、インテリア、照明器具等あらゆる部門があり、日本からも三十六社が参加しておりました。この見本市の展示場は、日本の晴見会場の約一〇倍位の大きさで、総面積は六八万平方メートルの拡大のものであり、実に百ヶ国以上の国の企業が出品に参加し、品種は五千四百種に達しており、これ等の製品がこの展示場と屋外展示においてグループ別に秩序正しく陳列され、かつ作動しておりました。

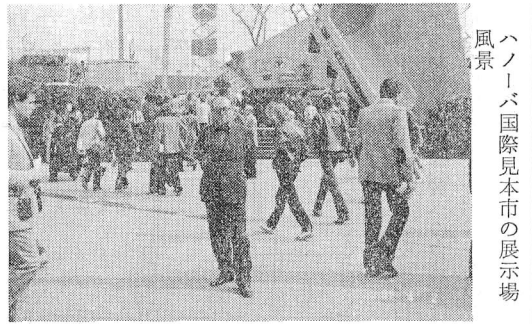
この品種の中の製品は約五百万点以上となり、出品企業は、五千三百社で、その七〇%がメーカーでありました。八日間の会期中に五三万人が訪れ、会場周辺には自動車のパークのため、五万台

収容出来ることになっていて、此等の規模の大きいのに驚嘆させられました。場内は万博を思わせる標識、軽食堂、インフォメーションセンター等が設けられ、草花も植えられ、カラフルな雰囲気の上に、スッキリとした風景でありました。場内には郵便局も、銀行も開業しており、洵に便利でありました。この見本市に参加して各企業は競って自社の新技術になる製品を陳列し、有益な商品取引を計画し、開発の成果を上げようとしていました。

この見本市が世界の特許取引所であると自負し、取引先の開拓、カストマーのキープを主目的にしておりました。ゆったりとした参観者に対して、落ちついた応待や



ハノーバ国際見本市会場内の風景



ハノーバ国際見本市の展示場風景

説明をしている光景は、日本のそれとは大分異なっているように見られました。我々も専門的な見地より視察をして色々教えられ、かつ視野を広げることが出来ました。

□国際見本市の特徴 我々はこの見本市を見学するに当って、電気関係、電子機器関係、プラント関係、事務用・情報用機器関係に重点をおいて視察しました。今回の見本市の特徴は、事務用・情報用機器の大きな進歩発達でありました。電子技術を駆使したこれ等の優れた製品が多く見られました。その数においては九三社、出品国二七ヶ国と云うことであり、注目を集めていました。主なものはコンピュータのグラフィック化、VTR、大型ゼロックス等が中心

でありました。照明器具も独特のデザインのもので多数見られ興味を引きましたが、写真を撮ることは許されませんでした。

□西ドイツの苦しみ 敗戦によりドイツは、東西ドイツに分割されてしまいましたが、西ドイツはその後復活してめざましい発展を遂げて来ましたが、全く驚くばかりでした。

而し人体に例えれば片足をもぎ取られた苦しい姿の状態であるように思われました。最近になって西ドイツの経済は延びなやみ、インフレの進行と共にその発展も下向きとなりつつあります。この理由について現地におとずれ、話を聞いて良く分かりました。片足歩行の疲れがあらわれ、労働力の低下、資源の不足等となって現れられて来たらしいのです。

西ドイツの苦しみは分かりました。彼等はそれにも拘らず、国を挙げて最大の努力をすることが良く分かりました。かつて日本人はドイツ人の技術・勤勉を本として学んで来ましたが、今日の状態は逆転しました。西ドイツ滞在中の会議においても良く出て来ましたが、現在では西ドイツは、日本の経済力・技術力を盛んに勉強しようとして燃えているようでありました。聞くだけでも洵に結構であります。今後我々も負けないよう大いに

努力せねばならないと思いました。

□ハルツの森 ハノーバからハイウェイで一時間半程の所に、ハルツの森と云う景色の良い、温泉の出る景勝の地があるので訪れました。ここにカイゼル一世が昔新生ローマ帝国を作ったゴスロの古城が昔のままの姿で残っておりまして、これを見て古い昔のドイツの姿と、その国柄を偲び感慨深く思いました。

□東西ドイツの国境を見て この古城の近くのボーグと云う町がありまして、ここで始めて東西ドイツの国境を見ることが出来ました。昔は一つの町でしたが、この中を流れる小川の中央で国が二分されているのです。古い川にかかった橋の中央の五〇センチ程の丸い標識が国境の印でした。向側はソビエト領東ドイツで、乞食同様の生活だと云っていました。百米先の望楼にはソビエト兵士が銃口を向けて監視しておりました。ここから先は大きな壁・鉄条網・自動発射装置のため絶対に入りは出来ません。西ドイツの大きな苦しみの一つを目前にしまして、敗戦の悲しみを思い浮べました。

□おわりに 短日々の旅行の感想を述べましたが、説明不足の点、又思い違いもあるかも知れませんがお許を頂きたいと存じます。小生このたび洛友会東京支部の副支

部長に推薦されました。少しでも皆様の御役に立てばと念願しております。よろしく御支援の程をお願いいたします。

電気系教室の改築について (第4報)

設計概要

電子工学科教授 池上淳一

電気系教室の建替えについては近藤教授から既に三回にわたり、洛友会報で説明されているので充分御承知のことと思いますが、其後、施設部と教室との間で設計に関する詳細な打合せが行なわれ、発注の段階に達しましたので、この機会に設計の概要について御報告致します。

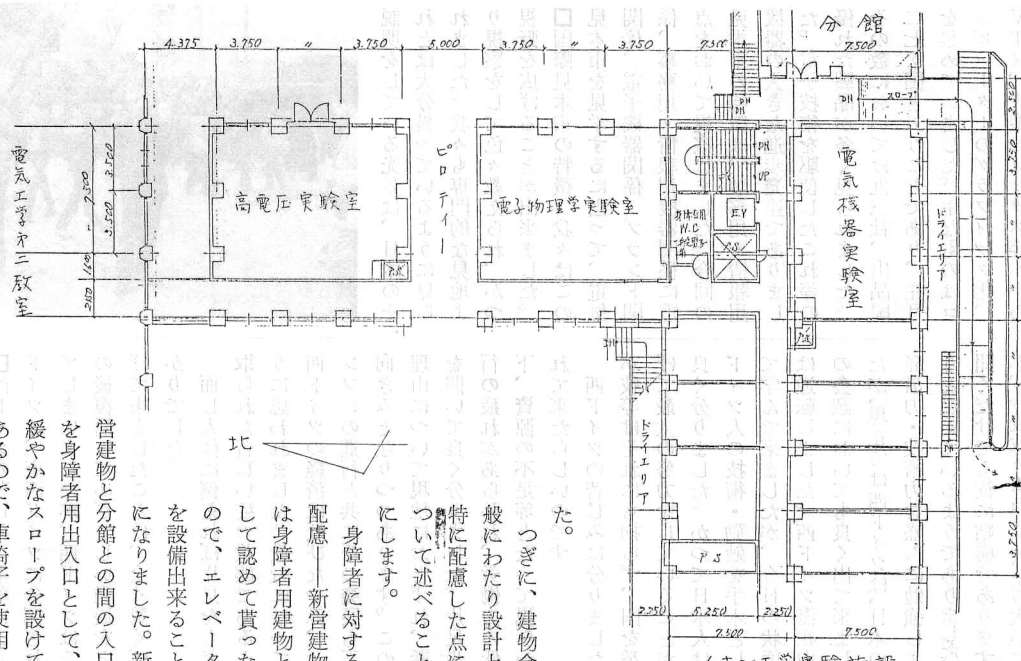
図1は新営建物の一階平面図を示したものでありまして、東西棟は地下一階、地上四階建て、東端は渡り廊下で分館(コンクリート二階建の元教授室のあった建物)に連結、西端はフレキシブル・ジ

イントによりイオン工学実験施設の建物に接続、南北棟は地下なしの四階建て、北端は渡り廊下で3号館(電気工学第一学科の建物)に連結されます。建築総床面積は約三二四〇平方メートルありますが、地下一階の約二二五平方メートルは電気室、機械室、ポイラー室として施設部が使用することになっております。図2は南側から眺めた新営建物およびそれに隣接する建物の外観を描いたものであります。建

物の外装については、イオン工学実験施設新営の際充分検討し、決定したとおり、保存棟(赤レンガ造二階建の西棟)と調和のとれた色彩のタイル張になります。

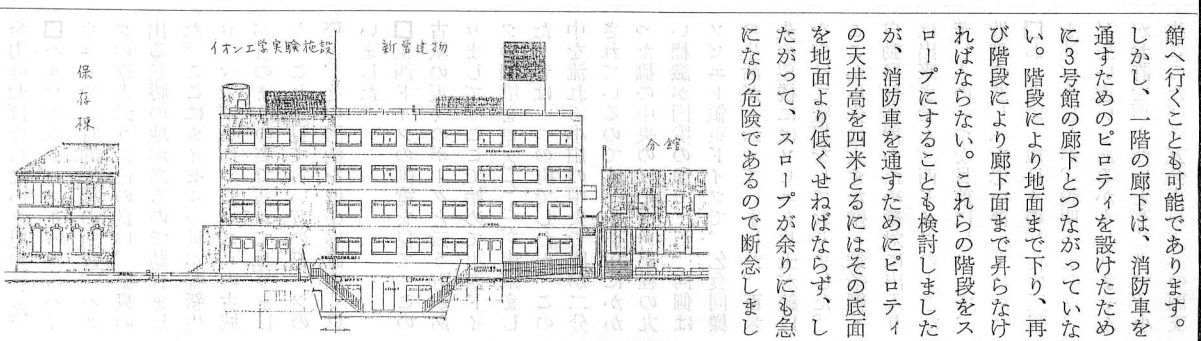
教室の改築はわれわれの永年にわたる願望でありましたので、新営建物の概算要求提出にあたり数多くの要求が盛り込まれていました。これらの要求を設計に組み込むために、施設部と密接な連絡をとり、施設部からの種々の問合せに対し迅速に教室側の要求を取り纏め、その詳細を伝える必要があります。このため教室主任を中心とした建築委員会と、ワーキング・グループとを結成し、その任

にあたりました。ところで、認可された予算内でわれわれの要求を満たすことは到底出来ないことが予想されましたが、建物の新営は何十年かに一度のことであるので、この際、教官研究費を注入してでも研究に必要不可欠な要求は実現しておくべきであるとの意見が建築委員会およびワーキング・グループ内で支配的であり、この



方針のもとに施設部との交渉を行った結果、研究費への食込みは相当の痛手ではあるが、当初の要求をほぼ満たせることになりました。

つぎに、建物全般にわたり設計上特に配慮した点について述べることにします。
身障者に対する配慮—新営建物は身障者用建物として認めて貰ったので、エレベータを設備出来ることになりました。新営建物と分館との間の入口を身障者用出入口として、緩やかなスロープを設けてあるので、車椅子を使用しても、この出入口から入り、エレベータを使用すれば、新営建物の何れの階へも行けることは勿論、渡り廊下によって3号館および分



た。3号館は身障者用建物ではないので、法規上は3号館の一階へ車椅子で行けなくてもよいわけですが、一旦建物外に出ないと3号館一階へ行けない構造にならざるを得なかったのは、誠に残念に思っております。

冷暖房について——新営建物の概算要求を提出する際に空調の必要な実験室の申請をしておいたのが認められたこと、施設部より別途申請していた集中暖房の予算が認可されたこと、建物新営の機会に講座負担で冷房設備を整えたいという希望が相当数にのぼったことなどにより、新営建物の過半数の部屋の冷暖房が完備することになりました。特別な実験室以外

の冷暖房は冬の灯油による温水暖房の配管内を、夏期には、冷却水を循環させて水冷式のクーラーの排熱を行なう方式をとっている。こうすることにより、将来クーラーを取付けたい部屋が出た場合、クーラーの排熱部を窓から露出させたり、排熱または冷却用のパイプを建物外壁に沿って這わせたりして、建物の外観を見苦しくすることを避けるよう配慮した。

なお、電気系の他の建物も別途予算が認められていますので、蒸気による集中暖房が行なわれることになっております。

連絡回線など——将来の大型計

算センターの端末機増設、研究室・実験室間の各種データの伝送などを考慮して予備回線を充分余裕をもって敷設してあります。すなわち、各階毎に端子板を設け、研究室・実験室と端子板間に充分な予備回線を敷設し、必要に応じ端子板において任意に接続出来るよう設計されております。

なお、各部屋、特に実験室については、部屋それぞれの特殊性を十分に考慮し、実験盤、水道栓、ガス栓、コンセント、換気扇、電話機などの設置場所や容量など細部にいたるまで、ワーキング・グループにおいて決定し、施設部に指示しました。

最後に、特殊用途の実験室について述べることにします。

高電圧実験室——図1に示した位置に、床面を廊下面より約一・四米下げ、二階を吹き抜けにして天井高を約八米にとった床面積約一〇〇平方メートルの高電圧実験室を設置します。この実験室の電源には専用トランスを使用し、実験室全体を電磁遮蔽し、有効な接地をとることによって、インパルス実験の際の誘導妨害が他の実験室に及ぶことを極力少なくする予定であります。

電子物理学実験室——プラズマ関係の研究など大容量機器を使用している研究が予定されている部屋

でありまして、床面を高電圧実験室と同じレベルまで下げて、天井高を高くしてあります。大容量機器を水冷するため、専用のクーリング・タワーを設置し、冷却水を循環使用する設計になっております。

なお、高電圧実験室および電子物理学実験室は大型機器の搬入・搬出が予想されますので、これら実験室の東側には大きな出入口を設け、建物に面してトラックが横付け出来るスペースを取ってあります。

電気機器実験室——この実験室は南側ドライ・エリアに面していますが、矢張り重量物を取り扱う実験室ですので、ドライ・エリアに蓋をして重量物の搬入を便利にしてあります。

なお、前記三実験室の天井にはホイストを取り付ける予定であります。

電波伝搬およびアンテナ関係の実験室——工学部内の建物はずべて地上四階に統一されることになっておりますが、屋上を利用して電波伝搬、およびアンテナ関係の実験が行なえるように計画しました。このため、屋上に約一七平方メートルの実験室を設けること、エレベーターおよび階段を屋上まで通すことなどを施設部と交渉し、実現出来ることになりました。なお、概

算要求提出段階では電波暗室の設置も検討されましたが、建設費の関係で断念せざるを得ませんでした。

無塵室——薄膜光デバイスなどの研究は塵埃の多い普通の部屋で実施しても、良好な結果を得ることは期待出来ませんので、三階にクリーン度一万程度の無塵室を設置することにしました。

計算機室——地下一階に約五六平方メートルの計算機室と約二八平方メートルの準備室を確保してあります。教

洛語会のこと

昭和七年卒 吉岡俊男

昭和四四年八月であった。

洛語会の趣旨は(古田提案のま

(イ) 本会は洛友会の会員にて、能、謡曲に興味を持つもの相集り、謡曲を楽しむ会である。

(ロ) 本会は洛友会東京支部に属し、その事業の一部として行動する。

(ハ) 本会の謡会には会員およびその家族共に出席することを得。となつて居り、現在もこれを踏襲している。

再建第一回(通産第一五回)の会合は同年一月八日、目黒区八雲の日本原子力発電八雲クラブで

室専用の計算機は現在のところ横河ヒューレット・パッカーより寄付されたYHP一〇〇〇およびその付属機器のみであります。将来、教室専用の計算機室として充実にせよく計画であります。以上、新営建物設計の大意について述べましたが、工事の完了は昭和五七年六月末になるものと予想されております。

本文が建物完成後の電気系教室の姿を御想像頂く一助にでもなれば幸いです。

開催された。当時の会員は、古田大長老の外、中谷潔(大四)、真崎尚忠(大四)、乙葉真一・滝本浩(大一五)、石川辰雄(大一五)、若林桜人也(昭五)、石川弘文(昭九)の諸氏および小生の九名で、八〇才前後の長老を中核に年輩者で占められていた。会社では長老格の私も、この会では全くの若輩で、良い勉強をさせられた。

当日の番組は、加茂、頼政、井筒、富士大鼓、安達原で、乙葉夫人が家族会員で出席された。その後、洛語会の例会は、年三回の制で、本年の第四九回迄開催されて居る。その間に、これらの長老の多くを亡くし、新たに幾多の中堅諸氏を加え、現在の会員数は家族会員も含めて一八名、私は今も尚世話を続けている。

会の定連としては、関三郎(大一一、宝生)を最長老とし、菊池保夫(大二三、宝生)、石川辰雄(大一一五)、西本憲三(昭一〇)、福岡正(昭六)、石川清(昭七、宝生)、石川弘文(昭九)、井上友一郎(昭一〇)、富岡正春(昭一三)、永安弘(昭一六)、泉秀雄(昭二〇)、近藤貞吉(昭二八、宝生)の諸氏。尚、家族会員として、乙葉きく(故真一夫人)、山本千代子(故三郎氏(大二五)夫人)、西山愛千代(虎一氏(昭一〇)夫人)、山本智佐子(新次氏(昭一六)夫

人)のご婦人方が参加され、語会の雰囲気や和やかにしている。観世と宝生は一緒に語会を持っているが、曲の文句や語り方に若干の相異があるものの、相互に異流の演技を楽しんでいる。ただ宝生の人数、番組の少ないのが気の毒である。

最近私は例会毎に番組を一夜漬でおぼいして出るようになるのであるが、皆と一緒に腹の底から声を張り上げて語り、語り終わってからは食卓を囲んで談笑の一時を持つことは、極めて楽しく又良いリクリエーションである。

ここで少しく昔を憶い出して見ると、再建当初は、ベテラン揃いであるのに、どうしても地話が揃わない。各自が天狗連なので勝手に語りながら、又各自の先生が違っているかなど色々議論が持たれたが、結局、地頭の古田先輩が数の大家で、素語にもその拍子でやられるので、皆がそれに合わせかねた為と判った。古田先輩のご健在中は毎回先輩の説教もあり、皆々これに大いに悩まされた。

山本三郎先輩は常にご夫人同伴で出席されるが、ご自身は語われず、語会の間、熱心に一同の語を聞いて居られた。氏は京都賀茂神社の宮司の出で、謡曲に出て来る故事来歴に深い関心を持って居られたからであるが、その美しい

夫婦愛には心を打たれた。氏亡き後、ご夫人は現在も例会に参加され、華を添えて頂いている。昨年一〇月、小生は原子力発電会社を辞し、発電用熱機関協会に移った。長年洛語会の世話を続けて来られたのも、会社の秘書の方々のお蔭であった。今後は適当な人に世話を譲りたいと念願している。

同窓会記事

卒業五十周年

同窓会(昭六八会)

今年には卒業五十周年ということ京都で物故者慰霊祭を営み二泊三日の旅行をする事に相成る。今回は宇野君が病気のため不参加に名歌を入れることができないのが残念だ。

六月六日(土)晴

心配していた天気も大丈夫のようだ。大半の会員は京都駅に集合し、バスにて十一時前洛北妙心寺着。福岡は会場である山内霊雲院にて一行の到着を待つ。松田長三郎先生・上西・青柳夫妻等は直接寺に来られる。松田先生は九十才の御老令であるが、私達に劣らぬ御元氣で特別参加して頂き一同感激する。

慰霊祭の行われる霊雲院は大永

六(一五二六)年に創建された塔頭であり、後奈良天皇が悟後修業のため度々臨幸されている由緒ある寺である。福山より来られた故中藤並びに故大西、故山本の三夫人も列席して下さる。慰霊祭は十一時半、妙心寺派管長通仙洞太室無文老大師を導師として厳粛に営まれた。十七人の亡き友の霊もさぞ悦んでくれたことであろう。法要の後管長と先生を中心に庭に面して記念撮影。書院にてお茶を頂きつつ、管長よりお話を承る。オギャツと生れたばかりの純真無垢の赤子の心に還れ。ついで四大智慧のお説法三十分余り。これを辞去して山内の花園會館にて管長と先生を中心に集い、中食を和やかに頂く。

十三時半バスにて母校電気教室の参観に向う。教室の前には昔ながらの大銀杏が聳え、懐しく我等を迎えてくれる。赤煉瓦積み風の玄関を入れれば、掲示板と暗い教室は昔のままであるが、他は新しく建ち替り、或は壊されつつある。完成後は面目を一新することであろう。二階の明るい新教室にて近藤教授より教室の近況を承る。教室を出て正門まで歩き、ここで中藤夫人と別れバスにて一路京都駅へ向う。一行二十五名富山行特急雷鳥に乗車し、十五時四十分出発。天気は良

車窓より眺める景色

は濃い緑が続き、心は軽快。車中では先生より頂いた小随筆を読んだり、先生の該博なお話を耳を傾ける。敦賀・福井を過ぎて京都より二時間、今日の目的地芦原駅に着く。

バスにて当地有数の白亜の近代のホテル八木に到着。旅装を解き直に大浴場へ跳び込む。十九時開宴。先生に乾盃の首領をとって頂き一同の健康を祈る。美事な御馳走に酒と歌と話がはずむ。酒の廻るに連れ先生の青春時代の歌を初めて拝聴。我々も昔に還り肩組み合って大いに歌う。時に御夫人方の美しいコーラスも流れて愈々興が添えらる。隣りも小学校の同窓会で賑かであったが、いつの間にか静かになる。こちらも二十時半に散会。甚好きはおか目八日賑かに打っていたが夜半より静かになる。

六月七日(日)晴
今朝もよい天気だ。早々と入湯する者もあり、散歩に出る者もあり。皆さん元氣はつらつ。朝のビールの売りも上々。今日の予定は東尋坊の奇勝を尋ね、永平寺に参詣し、三方町行である。九時バスは宿を出発する。関西電力福井事務所の中井次長が案内役として同行される。三十分余りで東尋坊に着く。巨大な輝石安山岩が見事な柱状節理を見せて屹立し、暗青

